

凄艶鬼

杉原希勇

その闇に潜む美しき鬼よ。

きみは誰だ。

■ 目次

第一章	地獄熱	4
第二章	鮮血乱舞	53
第三章	鎌倉情念	92
第四章	煩惱火	143
第五章	終怨賦	186
	あとがき	202

第一章 地獄熱

浅いまどろみが、男を夢の中へいざなつた。恐ろしく、また、そう遠くない過去の記憶が蘇る夢であつた。

男は立ち止まっていた。廊下だ。あと数歩で玄関ドアのノブに手が届く。振り向けば、床と壁と天井まで燃え広がる業火。地獄の烈火のごとく、男に襲い掛かろうとしていた。その恐怖に震え怯えながらも、彼の耳は烈火の中から聞こえる声を捉えていた。

「あなた…あなた、どこにいるの？」
「助けて！ パパ…熱いよ…」

だめだ、もう手遅れだ。男は両手で耳を塞ぎ、炎と叫び声に背を向けた。逃げよう。地獄の炎が自分を飲み込む前に。早く…早く。彼はそれしか考えられなかつた。ひとりで玄関ドアを抜ければ、外は漆黒の闇である。その空間にひとつ、ポツリと浮かび揺らめく青白い小さな火の玉。今度は、頭上から父親の声が聞こえた。

「あの灯りの中に鬼がいる。人間の血を啜り、生肉を食らう鬼がいるんだ」

突然、自分の額が割れ、溢れ出る生暖かい液体。押さえた両手が真っ赤に染まる様を目撃し、男は喉が張り裂けんばかりの声を上げた。

「う…うわああっ！」

「何よ。今さら叫ばないで」

なんとも冷めた女の声が、彼のまどろみと夢魔を終わらせた。

「最中はつまらなそうだったのに、居眠りしながらそんなに興奮しないでよ、まったく」

「夢か…ああ…」

大きく溜め息の男の名前は朱堂圭吾、四十六歳だ。現実へ戻れば、ここは新宿歌舞伎町のビジネスホテルの一室で、すっ裸の体をベッドに横たわらせている。そして、溜まったモノを噴出するためだけの女が、衣服を身につけているところだった。

「あたしは楽しませてもらったわよ」

女はすっかり口紅がとれた薄い唇を吊り上げた。

「あんななかなかイケメンだし、オジさんにしては凄かったから」
「よく言うぜ」

圭吾は上半身を起こした。身長179センチの、見事に引き締った体格だ。ジム通いで鍛えた隆々たる筋肉は、彼の個性のひとつである。また、一重のキレ長な両眼と太い眉、高く通った鼻と形の良い唇が、卵型の小さな顔面の理想的な位置にある。短く刈り上げた黒髪も含め、確かに女が言う通りのイケメンフェイスだ。

「俺は物足りないぞ。払った金のわりにサービス悪いぜ」

「とんでもない。大サービスよ。今どきね、生オーケーで五万円なんてそうはいないのよ」

「ふん」

「ところでござあ」

身支度を済ませた女は、ベッドの隅に浅く腰掛け圭吾の胸元を指差した。

「これ、ずいぶん大きなペンダントトップね。しかもふたつ。プレイの最中、ちよつと痛かったわよ」
長さ2センチの薄い長方形のプラチナ製である。そのふたつを指先に絡め、圭吾は言った。

「女房と息子の遺骨が入っているんだ」

「へえ…」

「こいつは、俺が一生背負つて生きる十字架さ」

「なるほど。事情ありなペンダントね」

女は立ち上がり、サイドテーブルのバッグを取った。

「ま、お客の人生劇場には立ち入らないのがあたしたちのルールなの。そうそう、お別れにひとつアドバイスするわ」

「なんだ？」

「今度女を買うとき、ここのビジネスホテルはやめた方がいいわ。壁が薄いよ。隣り部屋の呻き声が聞こえて、あたし少し気が散っちゃったわ」

「呻き声？」

「たぶん、隣りもあたしたちと同じことしてたんでしょ。じゃあね」

と、真つ赤な爪の指先を揺らしながら、名前も知らない一夜限りの女は、スチール製のドアの向こ

うへ姿を消した。一方、朱堂圭吾は再び裸体をベッドに沈ませ腕時計を見た。夜10時45分。

小さな溜め息のあと、白く無機質な天井を見上げ呟くのだ。

「九月二十八日か。刑事辞めて…もう半年過ぎたな」

脇が重くなってきた。今度は炎と鬼火の夢にうなされず眠れるだろうか。しかし、彼のまどろみは再度阻止された。

女が出て行つてから約10分後、ドアの向こうで突然響いた男性の叫び声である。それは、言葉になつていなかった。恐怖に遭遇した人間が、本能で喉を鳴らす「音」と表現すべきか。圭吾は全身バネのごとく飛び起き、10秒で下着とジーパンとTシャツを身につけた。音の発信源らしきドアの外へ走り出ると、エンジ色の制服姿の若いホテルマンが廊下へあたり込んでいる。

全身を震わせ、顔面蒼白。瞬きすらできない両眼に映る光景は、圭吾の隣り部屋だった。そのドア全開の間に立つ圭吾も、息の逆流で全身が硬直した。二十年間殺人課の刑事を勤め、死体は見慣れているはずの彼でさえ、体中の血液が凍りつく恐怖と戦慄の光景がそこにあった。

ビジネスホテルの狭いツインルームだ。ベッドと化粧台の間の僅かなスペースに白い木製の椅子があり、男が座っていた。生死云々は問題外だ。一糸纏わぬ全裸の体がパンク寸前の風船のように膨れ、もはや元の体格も人相も分からない。全身火傷による物凄い火膨れである。皮膚は焼け爛れ、あちこちで破裂して血を噴出し、膨れた裸体に無数の赤い筋を作り流れ落ちていた。両足は椅子に、両手は後ろで縛られ、どうやら腰も椅子の背凭れに縛りつけられているようだ。極めつけは、この膨れた物体の顔面である。両眼に突き刺さるアイスピック。その瞬間に噴き出た血しぶきが、化粧台の鏡を染

めていた。

死体の凄まじさに喪神しかけた圭吾だが、背後の悲鳴ではっと我にかえった。同じフロアの泊り客や従業員が集まり始めている。こんな光景を一般人に見せてはならないと判断し、彼は指紋に注意しながら静かにドアを閉めた。それから、集まった人々を見渡す。

「俺は元刑事です。マネージャーさん、いらつしやいますか？」

「は…はい」

一歩踏み出たスーツ姿の中年男性も、顔面蒼白だった。

「なんて…なんて…」

「落ちていて。大至急、所轄に通報してください」

そう告げたあと、圭吾はまだ腰を抜かしたままの若いホテルマンの側へ歩み寄った。警察手帳とおさらばしても、染み付いた職業癪が消えるほどの歳月は重ねていない。ここで何もせず元同僚たちの到着を待つことなど、彼には到底無理であった。

「発見のいきさつを知りたいんだ。話せるかい？」

肩や指先が震えていても、若者はなんとか頷くことができた。立ち上がる彼を同僚が支える。

「俺の部屋へ行こう。それと、従業員の方2〜3人、所轄が来るまでドアの前においてください。決してドアには触れないように」

圭吾は若いホテルマンを現場の隣り部屋へ連れて行き、椅子に座らせた。それから、冷水のグラスを若者に渡してベッドの隅へ腰を降ろした。低い声で、ゆっくり語りかける話術。刑事時代に養った

技である。

「被害者はひとりで来たのかい？」

「いいえ、お連れさまがいらつしやいました」

俯き、両手で包むグラスを見つめながらも、若者は多少落ち着いたようだ。

「夜9時ごろでしたか。若い女性の方とご一緒に来られました。ご予約はありませんでしたが、おふたりでツインルームを……」

「名前や住所を確認しましょうか？」

と言う同僚に、圭吾は顔を振って答えた。

「それは所轄が来たときに結構。えーと……きみ、山口くん」

若者の制服胸元のネームプレートだ。

「連れの女性って、どんな人が覚えているかい？」

「そりゃもう、はつきり。物凄い美人でしたからね。二十二〜三歳で、背中まで掛かるストレートな黒い髪もツヤツヤしてました。たぶん、高級コールガールでしょう。化粧や服装ですぐ分かりましたよ」

「美人の高級売春婦……か」

「でも、能面みたいに無表情で。ぼく、一度だけ目が合ったんですけど、そのときぞっとしましたね。氷みたいな目つきだった」

「その氷の美人は今、部屋にいなかったね」

身を乗り出し続ける圭吾。

「帰ったのかい？」

「はい。それがちよつと妙なんですよ」

ホテルマンの山口は、冷水をひと口飲んで言った。

「10時少し過ぎたころ、別の男性がひとりいらつしやいました。その美人に呼ばれたとおつしやいました。野球帽を深く被つて、夜なのにサングラス掛けて…顔はほとんど見えませんでした」

「怪しげだな」

「ええ、ぼくもそう思いました。でも、女性の人相や服装を細かくおつしやるので、一応お部屋に電話し、彼女の了解を得て部屋番号をお教えしました」

「その男性はどんな感じだった？ 若いとか、中年とか」

「たぶん若いでしょう。体格や身のこなしや…そう、ナイキのヴィンテージスニーカーを履いていたから、中年ではありません」

「なかなかの観察力だぞ、山口くん」

「ど…どうも…」

「ちなみに、その若いらしき男は名前を言ったかい？」

「はい。佐藤と」

「ああ、そりゃ100パーセント偽名だな。で、彼は被害者と美人売春婦の部屋へ行つたんだね？」

「行つて、ほんの5〜6分後に彼女を連れて帰りましたよ。そのとき、黒い革のアタッシユケースを持っていました。殺された男性が、チェックインのとき持っていた物ですよ。変だなと思ひ、部屋に電話